

# 言語表現に基づく情報の解釈

— 合成・変成・再成 —

高 本 條 治

## ■一 はじめに

高本(二〇〇六)では、《言語表現が伝える二つの情報》として、「言表情報 (information)」「言外情報 (exformation)」「実演情報 (performance)」の三者を区別した。これらのうちには、言語表現が直接表示する意味を語用論的に発展させて得られる情報も含まれている。ただし、この三者はあくまでも Sperber and Wilson (1986) で提唱された「関連性理論」で言うところの「表意 (explicature)」の範囲にはほぼ収まる。

こうした情報区別は、もとより日本語の語用論的分析のための一指针となることを目指している。ならば当然、「表意」の範囲を超えた情報に関しても問題にせざるをえない。そこで小論では、「言語表現に基づく二つの情報」として、「合成情報 (conformation)」「変成情報 (deformation)」「再成情報 (reformation)」の三者を区別することを通じて、「表意」を越えた「推意 (implicature)」の解釈や隠喩・象徴解釈などの背後で働く解釈機構に言及していきたいと思う。

## ■二 言語表現が伝える情報の区別

言語表現が実際に発話として使用されるとき、聞き手に伝達される情報には大別して二種類ある。この区別に関して明確に言及したのは Grice (1975) であった。その中でグライスは、「what is said」(発言内容)と「what is implicated」(含意内容)とを区別した。前者は言語表現が字句通りの意味で直接に伝える情報であり、後者は何らかの推論過程を経て得られる言外の情報(含意されている情報)である。

次ページの図1に、グライスの「伝達内容 (what is conveyed)」の低位分類の概要を記した。この図は Sadock (1978) の整理に基づいたものである。言語表現が伝える情報に関するこうしたグライスの分類は画期的なものであり、その後の語用論の探究方法を強く決定づけた。

しかし、グライスの分類では「発言内容」(実際に言語によって表現された情報)以外はすべて「含意内容」であるとされたために、「含意内容」の内包が大きく膨らみすぎ、逆に、「発言内容」の方が過少に見積もられてしまう結果となった。

図1 グライスによる「伝達内容」の下位分類

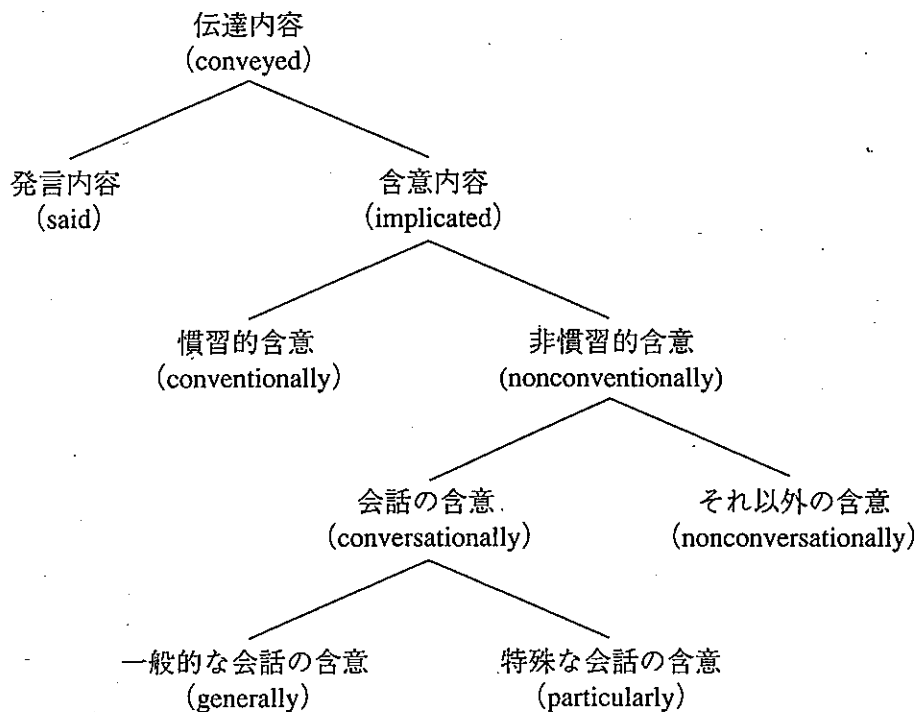
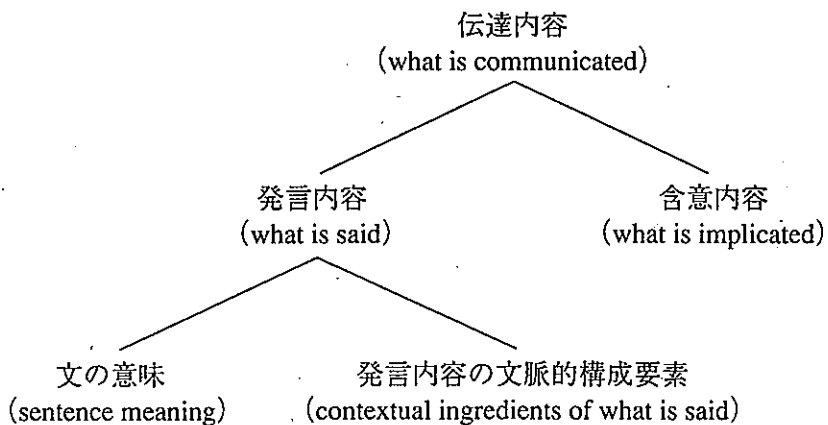


図2 「標準的なアプローチ」とされる下位分類



言語学では、グライスのこの分類成果を批判的に取り込みながら、言語表現が伝える情報の分析に関する妥当性の模索が行われた。Sperber and Wilson (1986)・Carston (1988)・Récanati (1989) などの議論を経て、一つの合意が形成されていった。それは、言語表現が字句通り直接示す意味内容（いわゆる「文の意味」）だけが“what is said”ではないという見方である。言語表現によって明示的に伝達される情報には、文脈に応じてさまざまな補充要素や発展要素が元の「文の意味」に接合しうる。そうした補充・発展的な意味要素をも“what is said”（明示的に伝達された情報）として見なそうとする考え方である。

言い換えれば、発話に用いられた元の言語表現が字義通りの意味で解読された結果のみの段階では、話し手がその言語表現によって明示的に伝達しようとした情報としてはまだ十分とは言えないと見なすのである。文脈に応じた（すなわち語用論的な推論を用いた）肉付けや意味の絞り込みを経た段階で初めて、話し手が明示的に伝達しようとした情報が復元されるのだ。

目下のところ、言語表現が伝える情報の分析に際しては、このような考え方が「標準的アプローチ」として広く採用されるようになってきている（Récanati 2004）。前ページの図2がその「標準的アプローチ」の概略を示している。ここで重要なことは、グライスの分類に比べた場合、“what is said”の領域が拡大され、しかもそこに語用論的な推論プロセスが導入されている点である。相対的に“what is implicated”の領域はグライスの考えよりも縮小されている。

### ■三 言語表現が伝える情報

そのようなアプローチを採る代表例が Sperber and Wilson (1986, 1995) の「関連性理論 (Relevance Theory)」である。関連性理論では、発話の理解過程を「表意 (explicature)」解釈の過程と「推意 (implicature)」解釈の過程に分ける。表意は、コード解読の結果得られる論理形式を発展させた解釈成果であり、推意は、文脈推論によって得られる解釈成果である。

関連性理論における一般的な発話理解の過程は、次ページの図3のようにおおむね整理することができる。このフロー図は、Sperber and Wilson (1986, 1995)・Blakemore (1992)・Carston (2002) に記述された内容をもとにまとめている。

また、小論では「情報」という概念を拡張して使用するため、Neebenders (1998) の考え方を援用する。ノーレットランダーシユは、通常の「情報 (information)」概念とは区別して、「外情報 (exformation)」という概念を提唱している。図4に示すのは、ノーレットランダーシユが「会話の木 (the talking tree)」と呼んでいる図を発展させたものである。

左の木では情報の処分、つまり「外情報」の生成を通して情報が圧縮される過程を表している。この過程は「集約 (incitation)」と呼ばれる。一方、右の木では言語表現に含まれる部分的な情報が受け止められ、それが拡張されている。この過程は「展開 (excitation)」と呼ばれる。つまり、言語表現に託された情報と「外情報」とは集約と展開によって段階的に結びつけられるのである。

図3 「関連性理論」における一般的な発話理解の過程

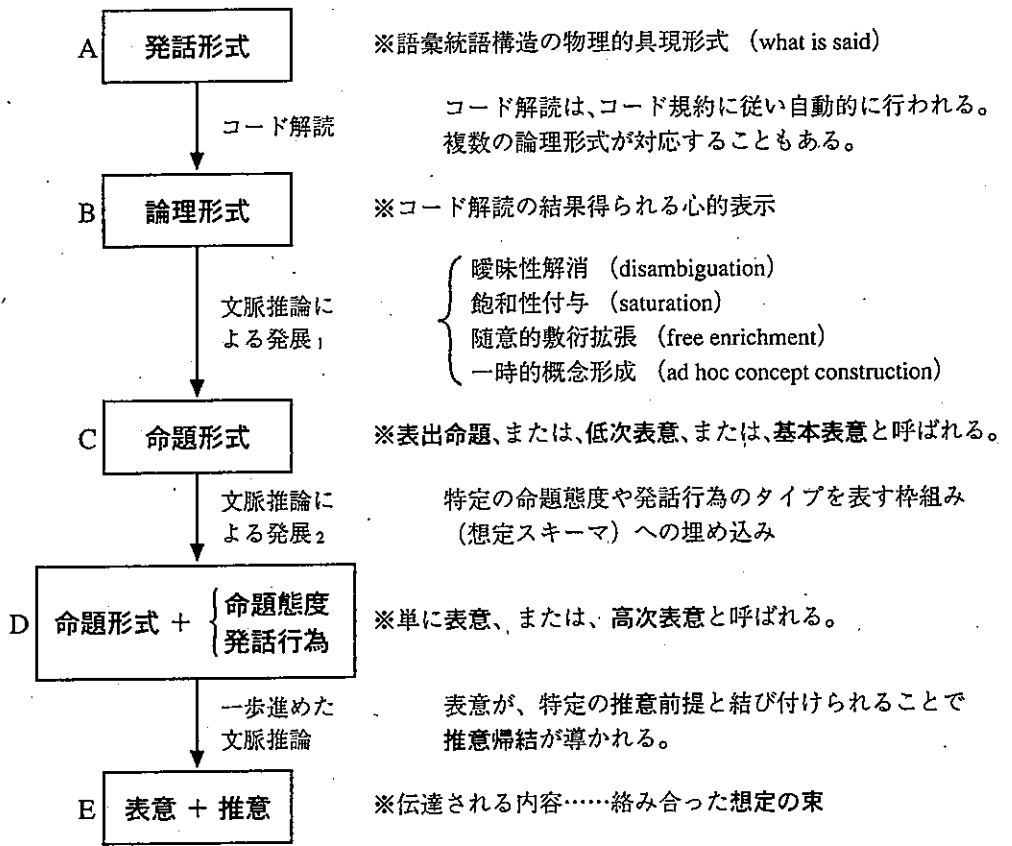
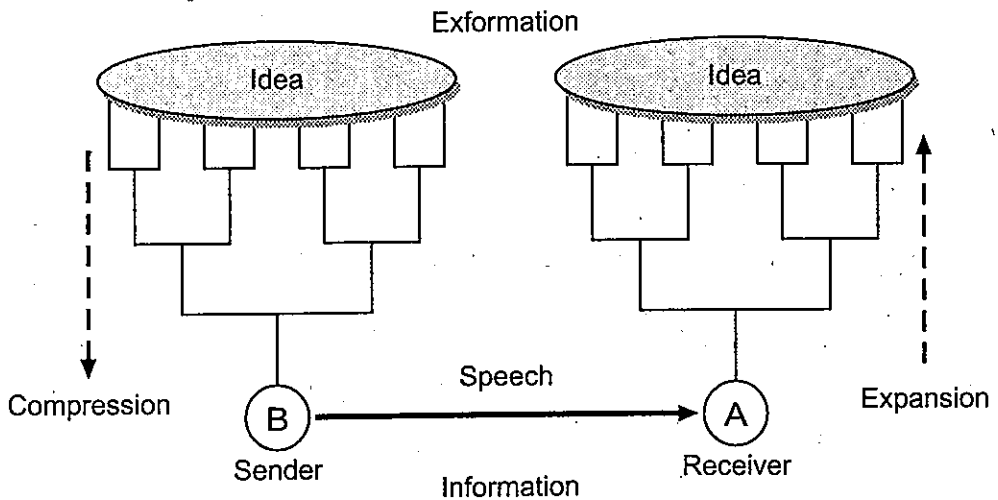


図4 ノーレットランダーシュによる「会話の木」



こうした「関連性理論」の考え方やノーレットランダーシュのアイデアに基づきながら、高本(二〇〇六)では、以下のよう  
に「言表情報」「言外情報」「実演情報」の三者を区別した。

(1) a 言表情報 (information) 知覚可能な言語形式 (form) の内 (B) に現に表示されている意味情報。すなわち、表現者が言語形式として具現した意味情報であり、理解者が言語形式を解読することによって得ることのできる意味情報のこと。

b 言外情報 (exformation) 知覚可能な言語形式 (form) から除外 (exclude) されており、それゆえ、得られた言表情報に対して拡張 (expand) しなくてはならない想定情報。すなわち、表現者が言語形式としては具現しなかった想定情報であり、理解者が言表情報をより確定的なものにするべく推論によって導出する想定情報のこと。

c 実演情報 (performance) 言語表現行為という performance (実演・遂行) に伴うさまざまな関連情報。すなわち、表現者が言語形式を物理的に具現する際にそれと並行して顕示する付随情報であり、理解者が表現者側の態度や姿勢を伺い知るために利用する (言語形式としては構成されていない) 付随情報のこと。

次に掲げる詩作品をもとにして、言語表現が伝える情報の解釈がいかに揺れるものであるかを確かめてみよう。取り上げるのは銀色夏生の「どうしても」という詩作品である (銀色夏生『詩集すみわたる夜空のような』角川書店 二〇〇五年)。

(2) どうしても

と

きいた時

あなたはとても悲しそうだった

だから

どうしても

と

答える時

僕は

こころを

まっ白にしなければならなかった

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬

(3) この詩の場合、次のような点が解釈上の課題となる。

a ③行目の「きいた」は、「誰かが誰かに訊いた (尋ねた)」のか、それとも、「誰かが誰かから聞いた (耳にした)」のか。これらは言外情報の問題である。——ここで解釈のしかたは当然、⑩行目の「答える」という動詞の解釈とも連動する (「誰が誰に対して何を答えた」のか)。  
b ①行目の「どうしても」のあとにはどのような内容が後続すると想定できるのか。また、この「どうしても」はどのような態度・姿勢を帯びているのか。これは実演情報の問題である。——ここでの解釈のしかたは、⑧行目の「どうしても」の解釈のありかたと連動する。

#### ■四 言語表現に基づく情報

高本(二〇〇六)で取り上げた「言語表現が伝える三つの情報」(言表情報・言外情報・実演情報)は、関連性理論での「表意」の範囲におおむね留まっている。そこから一步先に進めた文脈推論の前提や帰結である「推意」の問題は《言語表現が伝える情報》という枠組みではなく《言語表現に基づく情報》として整理する必要があると考えている。以下、小論では「合表情報 (conformation)」「変表情報 (deformation)」「再成情報 (reformation)」という三種の情報区別を提案する。

##### A 合表情報

「合表情報 (conformation)」とは、さまざまなコンテキスト (context) と照合することを得られる推論成果を、言語表現が伝える情報と総合することで合成的に (con-) 形成 (formation) される情報である。ここで言うコンテキストとは、理解者がその段階で利用可能なすべての想定を指す。合表情報は、関連性理論の「推意」に相当する。

例えば、文芸作品を解釈する場合、作者に関する知識は解釈を方向づける上で、かなり決定的なコンテキストとして利用される。以下に掲げるのは尾崎放哉による自由律俳句である(句集『大空』所収)。引用は『放哉全集第一巻』(筑摩書房 二〇〇一年)に拠った。

##### (4) 渚白い足出し

尾崎放哉という句の作者に関する知識がない場合の解釈を、学部三年の女子学生に自由に語ってもらった解釈をまとめたのが次の内容である。

(5) まず「渚」という点で夏の海の情景が想起される。「渚」が「白い」というのは、夏のまぶしい光の感じを表している。「足出し」というのは、暑い「渚」で冷たい海水に足を浸している情景である。

いや、そうではない。「渚」で「白い足」を出したのだ。夏の初め頃の情景。自分のまだ日焼けしきっていない「足」を海水に浸けたときに予想以上に白く感じられ、その白さがまぶしく、「ああ、夏が来たんだなあ」という喜びが感じられた。自分の心はこれから始まる夏の希望に満たされている。

それに対して、作者・尾崎放哉に関する知識がある場合の解釈は明らかに異なってくる。次に掲げるのは大学院二年の男子学生に語ってもらった解釈をまとめたものである。この学生はこの句の作者が尾崎放哉であることを知っており、また、放哉がどのような人生を送ったかということに関してもある程度の知識を持ち合わせている。

(6) 尾崎放哉は長年病床で暮らした。「白い足」というのも、尾崎自身の「足」が病弱なため「白い」色をしていたことを表している。時間は日中。「渚」で「足」を出したのはいいが、結局は何をするでもなくただ佇んでいただけ。「渚」や砂浜も白いが、その中でも「足」が白かったということから、放哉の病状がよくなかったことがわかる。

時間は夜かもしれない。夜の「渚」。月が出ているかどうかはわからないが、暗い夜の「渚」でも「白い足」が見分けられるということは、それだけよほど「足」が白く病的に見えたということだろう。

なお、この句について、専門研究者は次のような評釈をしている。伊沢元美『尾崎放哉』（桜楓社 一九六三年 新訂版一九八六年）からの引用である。

(7) 海岸の浪うちぎわに腰をおろしている人が白い足を投げ出してるところである。この人を女ときめてかかるのは早計に思う。「白い足」から女と想像するであろうが、海水に濡れている渚の黒ずんだ色に対して人の足は白く浮きあがるのだ。(中略)

「渚」と先ず置いて広々とした景を出し、つぎにいきなり「白い足出し」と敍して一番眼に鮮かに映ったもののみを抜き出して読者に示すのである。その人がどういう人であるかを一切省略する。それだけ「白い足」が「渚」を舞台として鮮かさを強める。(後略)

ここで興味深いことは、専門研究者である伊沢氏がこの句を解釈するにあたって、尾崎放哉が病身であったという情報を殊更利用していない点である。むしろ、伊沢氏がそのような放哉の伝記的境遇を知らなかったとは考えられない。伊沢氏はむしろ、作者が置かれた境遇を強いコンテクストとして利用することをあえて避けたのではないかと思われる。そうすることによって、ここで主張されているような尾崎放哉の句風を前面に出した合成情報の引き出し方を意図したのではあるまいか。

作者に関する知識というコンテクストが作品解釈の上で決定的な役割を果たすことは、次のような実験的試みによっても確かめることができる。次に示すのは八木重吉の「春」と題された詩である(詩集『貧しき信徒』所収)。引用は『八木重吉全集第二巻』(筑摩書房 一九八二年)に拠った。漢字は常用漢字表の字体に置き換えた。

(8) 春

黒い犬が

のつそり縁側のとこへ来て私を見てゐる

八木重吉という作者に関する知識がない場合の解釈をまず紹介しよう。次に掲げるのは大学院二年の男子学生に自由に語ってもらった解釈をまとめたものである。

(9) タイトルが示す通り「春」の情景を表現した詩。「のつそり」という表現から「黒い犬」はそれなりに大きめの黒犬であろう。また「黒い犬」と雑駁に呼んでいることから、この犬は「私」の飼い犬ではなく、どこからか野良犬なり知らない犬が「私」の住んでいる家の庭先に入ってきて、「縁側のとこ」から「私」を見ているというのである。

「私」は「縁側」ないしは「縁側」に隣接する座敷(障子を開け放つて縁側が見える座敷)にいる。そこで「私」は日向ぼっこがてら腕枕でもしながら横になっている。庭に入ってくる「黒い犬」をつぶさに発見したわけだから、「私」の方もずっと庭を眺めて何もしいない時間が流れていた。

そうしたほのほのとしたり、ゆっくりと時間の流れる昼下がりのひとこまを描いた詩である。

この学生の場合、「春」という題名に大きく依存しながら、明るくのんびりとした春の昼下がりの情景を解釈している。ところが、作者・八木重吉に関する知識の有無が、この「春」という詩の解釈を大きく揺さぶる要因であることが調査の結果わかった。

調査方法は次の通りである。合計一〇〇名の学部一年生の学生を五〇名ずつの二つのグループに分け、Aグループには作者名を伏せ、何の資料も与えないで詩作品「春」の解釈を自由に記述してもらった。一方、Bグループには、ウェブサイト『青空文庫』(http://www.aozora.gr.jp)の「作家別作品リスト」に掲載されている作家紹介の文章に基づいた資料を配布し、それを読んでもらった上で詩作品「春」の解釈を自由に記述してもらった。Bグループの被験者に配布した資料の内容は次の通りである。

(10) 八木重吉は早世の詩人。一八九八(明治三二)二月九日、東京府南多摩郡堺村(現在の町田市)に生まれ、東京高等師範学校に進む。在学中、受洗。卒業後、兵庫御影師範の英語教師となる。二四歳で、一七歳の島田とみと結婚。この頃から、詩作に集中し、自らの信仰を確かめる。一九二五(大正一四)年、第一詩集『秋の瞳』刊行。以降、詩誌に作品を寄せるようになるが、一九二六年、結婚を得て病臥。病の床で第二詩集『貧しき信徒』を編むも、翌一九二七(昭和二)年一〇月二六日、刊行を見ぬまま他界。『貧しき信徒』は翌年、出版された。「春」という詩は、この『貧しき信徒』に収録されている。

調査は二〇〇七年六月一五日、授業科目「国語(書写を含む)」の枠内において行った。A・Bの各グループから五〇名ずつの解釈記述を無作為に抽出して検討を行った。そのうえで、この「春」という詩が「明るい情景や心情」を表現したのか、それとも「暗い情景や心情」を表現したのか、自分の解釈がどちらに傾斜しているかを二者択一の形で尋ねた。

集計結果は次の表の通りである。解釈の差は歴然としている。

		明るい	暗い	合計
Aグループ	44人	6人	50人	
Bグループ	8人	42人	50人	
合計	52人	48人	100人	

#### B 変成情報

「変成情報(Deformation)」とは、言語表現が直接明示する意味内容から離脱・逸脱(De-)して形成(Formation)される情報。隠喩(メタファー)としての解釈や象徴(シンボル)としての解釈のほか、皮肉(アイロニー)としての解釈もここに含まれる。

例えば、八木重吉の詩作品「春」の場合、Bグループで「暗い情景や心情」を表現していると解釈した学生の大半は、「黒い犬」を動物としての「犬」そのものではなく、「死そのもの」「死を告知する者」「死に神」「冥界からの使者」「死の報せ」「死ぬべき運命」「迫りくる死の恐怖」「死の意識の反映としての幻影」



「病に冒されていく不安な心情の現れ」「不吉な未来の象徴」「自分の体をむしばむ病の比喩」というような捉え方をしていた。

文芸作品の解釈においては、描写や記述として解釈すればよいのか、それとも隠喩や象徴として解釈すべきなのかがしばしば問題となる。次の詩は藤富保男の「子」という作品である。学部生向けの演習授業で例年取り上げている作品だが、常に描写・記述解釈と隠喩・象徴解釈とで意見が分かれる。引用は「藤富保男詩集（現代詩文庫）」（思潮社 一九七三年）に拠った。

(11) 子

子供たちは

桐の大きな葉が散つているところで

何かを追いかけて ころがっていた

一人が魔法のようにいなくなると

一人がサイレンのように叫ぶ

村の上には

おじさんの鼻のように

大きい雲がふくれて

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

まず、この詩に対する描写・記述解釈の例を見てみよう。なお、これ以下に示す三つの解釈記録は、二〇〇七年度の学部三年向け授業「国語学演習B」の発表資料・授業所見に記されたものである。

(12) (描写・記述解釈の例)

どこかの田舎（「村」）で「子供たち」が鬼ごっこなどをして遊んでいると、いつの間にかその中の「一人」が神隠しにでもあったかのように消えてしまい、そのことにふと気づいた残りの「子供たち」の中の「一人」が、いなかった子の名前をかん高い大声で叫ぶ。しかし、別に神隠しにあったわけではなく、夕方になったから最初の「一人」が帰っただけのこと。

そういう「村の上」の空は晴れ渡り、丸い「大きい雲」がポワーンと浮かんで、あたかも「子供たち」を見守っているかのように感じられる。かくして「村」にはいつも通りのどかな時間が流れる。

また、次に示す二つの解釈記録は、いずれも隠喩・象徴解釈の事例である。

(13) (隠喩・象徴解釈の例1)

「おじさん」とは「社会で権力や武力をもった強い立場の人間」であり、「子供たち」は「社会で権力や武力を持っていない弱い立場の人間」である。「村」は戦時下にある。

桐は落葉高木であって、その葉が落ちるのは十月頃からである。桐の葉はまだ青いうちに散ってしまうということである。しかもその散る様子が大変潔くて、壮絶とさえ思える程だという。「桐の大きな葉」は戦時中に国家のために潔く死ぬことを強要された多数の若者たち（子供たち）である。

皆生き延びることを求めてはいたが、結局は殺されてし

まい、死体となって「ころがっていた」。さつきまでは生きていた者も次の瞬間には死んでいた。そうした驚愕や恐怖や怒りから、激しい叫び声があちこちで上がる。

「おじさん」は「子供たち」を戦場へ送る権力者であり、「鼻にかける」や「鼻を高くする」のような表現からわかる通り、「大きな鼻」は傲慢さの象徴である。「大きい雲がふくれて」は恐ろしい戦禍が、権力者の傲慢さによつて平和な「村」にも迫りつつあることを暗示している。

(14) (隠喩・象徴解釈の例2)

「子供たち」とは、まだ大人になっていない存在を指す。「桐の大きな葉」は「おいで、おいで」と手招きをしているかのように揺れながら「散っている」。早く大人にならなさいと誘っているのである。「子供たち」も大人へのあこがれを感じながら、早く大人になるすべを探す。

いち早く「魔法」を使つたように大人になつた友だちがいるのを知ると、「早く大人にならなければ」という思いが、けたたましく心の中で警報を鳴らす。

「大きい雲」は積乱雲である。嵐の前兆としての「雲」はこれから不安定な状態になることを暗示している。理想として描いた大人の生活と、現実の大人社会での生活とは別物だからである。「子供たち」は「子供」でいられる時間の尊さをほとんど考えずに早く大人になりたいと願うものだが、現実はずっと厳しいものである。

隠喩や象徴とは別タイプの変成情報を引き出されることもある。その一例が、一九六四年(昭和三九年)に発売され、松尾

和子とマヒナスターズが歌つて大ヒットとなつた「お座敷小唄」の歌詞の解釈に見られる。

次に示すのはその「お座敷小唄」の一番の歌詞である。JA S R A Cへの登録では、作詞者は「不詳」、作曲者は陸奥明とされている。

(15) 富士の高嶺に降る雪も

京都先斗町に降る雪も

雪に変わりがなしいぢやなし

融けて流れりやみな同じ

① ② ③ ④

このうち傍線を付した③行めの「雪に変わりがなしいぢやなし」という表現は、この歌がヒットしていた当時かなり物議をかもした。「読売新聞」一九八九年四月一日付けの東京都民版掲載記事「わたしの記念日と和田弘」の中で、マヒナスターズのリーダーである和田弘氏は、この部分の歌詞について「日本語じゃない」などのクレームがついたりもした」と述べている。またその記事の中で、もともとはバーで若いホステスが口ずさんでいた歌を採譜したのが「お座敷小唄」であり、もともとは「あるぢやなし」と歌われていた箇所をメンバーと相談して「ないぢやなし」に変更したという経緯が明らかにされている。

③行めの「雪に変わりがなしいぢやなし」と、④行めの「融けて流れりやみな同じ」との結束手解釈に着目してみると、両者の間には次の二通りの結びつけ方がある。

(16) a ③といふのも④ ④ダカラ③

b ③とはいへど④ ③シカシ④

解釈上、優勢なのはaの方である。つまり、「雪に変わりが

ないじゃなし」を「雪に変わりが無い」という意味で解する場合である。このとき、aの解釈は「ないじゃなし」を「あるじゃなし」と同等に扱う変成情報に基づいている。一方、bの方は「ないじゃなし」という言語表現が示す言表情報に従った解釈であるが、こちらの方が劣勢な解釈となる点は興味深い。

### C 再成情報

「再成情報 (reformation)」とは、それまでに形成された情報を破棄したり、それと並行させたりすることで、新たに再び (re) 形成 (formation) される情報。解釈の曖昧性、すなわち、複数の解釈可能性が自覚される場合、再成情報に基づく心的操作が行われている。また、再成情報はしばしば言表情報の捉え直しを誘発し、場合によっては言語表現自体の「書き換え」をも引き起こしうる。

ここでは、関根弘による「ウサギの罌」という詩作品を例に挙げて検討してみることしよう。引用は、入沢康夫〔ほか編著〕『詩のレッスン——現代詩一〇〇人・二二世紀への言葉の冒険』（小学館 一九九六年）に拠った。

#### (17) ウサギの罌

- ストライキのとき  
ウサギパンを食べた  
①  
という話を讀んだため  
②  
ウサギの罌で  
③  
人を殺した  
④  
⑤

- 夢をみた  
⑥  
さよならの  
⑦  
合図をするため  
⑧  
あげた指で  
⑨  
相手の目を  
⑩  
ついでにしまったことがある  
⑪

まず、構造的には⑥行めの「夢をみた」を単独の文と認定するか否かが解釈上の問題となる。次のaでは①行〜⑥行を一つの文と認定しているのに対して、bでは①行〜⑤行までの文とは区別して⑥行めを単独の文としている。

#### (18) a ストライキのとき／ウサギパンを食べた／という話を

讀んだため／ウサギの罌で／人を殺した／夢をみた。

さよならの／合図をするため／あげた指で／相手の目を

をついでにしまったことがある。

#### b ストライキのとき／ウサギパンを食べた／という話を

讀んだため／ウサギの罌で／人を殺した。

夢をみた。

さよならの／合図をするため／あげた指で／相手の目を  
をついでにしまったことがある。

説明の都合上、以下の分析ではこのうちaの文認定のしかたを採用して話を進めていくことにしたい。第1文の構造的曖昧性を、高本（一九九九・二〇〇〇）で提唱している「文節木」（文節関係解析木）を用いて検討してみよう。まず、「ストライキのとき」の保留が「食べた」で解除されると見る場合である。

図5 「罨で」は道具格か、場所格か

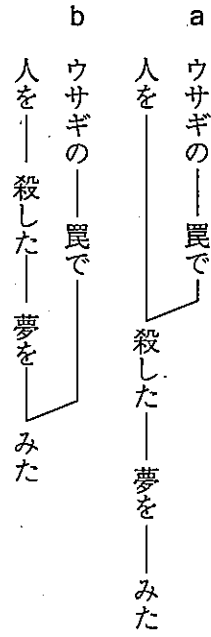
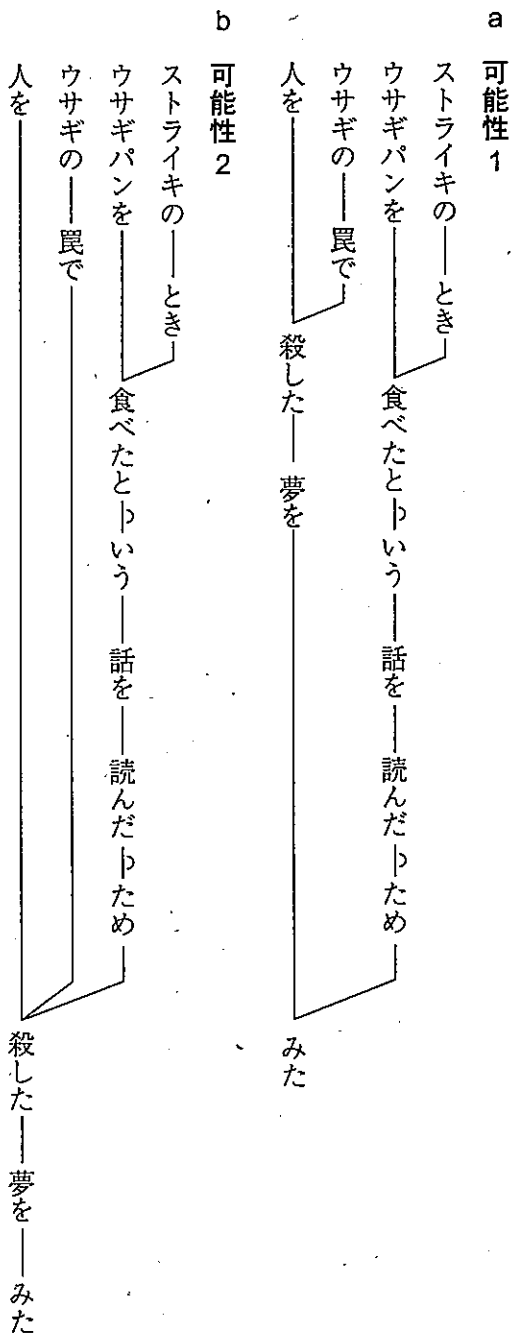


図6 「読んだため」の保留のしかたの可能性



この場合、図5に示したように「罨で」を道具格として捉える構造分析(a)と、場所格として捉える構造分析(b)の両方が解釈の可能性としてはありうる。また、図6に示すとおり、「読んだため」の保留のしかたも、可能性としては二通りある。aの方では「読んだため(夢を)みた」のであり、bの方では「読んだため(人を)殺した」のである。図5・6において、いずれの構造分析を行うかは、解釈者の主体的な解釈に応じて変動しうるのである。

次に、「ストライキのとき」の保留が「読んだ」で解除されると見る場合について検討してみよう。この場合も、「読んだため」の保留のしかたは、可能性としては二通りある。次ページの図7を参照されたい。図6と同じく、「読んだため(夢を)みた」のか(a)、「読んだため(人を)殺した」のか(b)という違いである。

さらに、「ストライキのとき」の保留が「殺した」で解除されると見る場合も考えられる。この場合は「読んだため」の保留のしかたは図8 aの一通りしかないと思えるのが通例である。つまり、bは通常の構造分析では許容されないということだ。文節木の保留性リンクが交差していることが構造分析としての許容性の低さを物語っている。これは、文法研究でしばしば「魔の交差」と呼ばれる誤った構造分析のしかたである。

ところが、面白いことに、実際の演習発表においては、図8 bの構造分析に基づく解釈を採る学生がたまに出てくる。つまり、構造的な妥当性が低いにも関わらず、そうした解釈をあえて選択するのである。このようなケースでは、言語構造を乗り

越えて変成情報が形成されているのだと見ることが出来る。

さて、最後に、「ストライキのとき」の保留が「みた」で解除されると見る場合を検討しよう。図9に示したように、この場合、「読んだため」の保留のしかたは、可能性として二通りある。第一は「読んだため(人を)殺した」という分析(a)であり、第二は「読んだため(夢を)みた」という分析(b)である。

一見するとbの解釈は不条理だと思われるかもしれない。しかし、実際にはこの解釈を採る学生もいる。その場合は、「相手の目をつく」という表現を実際の傷害行為ではなく、「相手に目に物見せてやる」という気概を表す」というように象徴的に捉えて(すなわち変成情報を形成して)解釈を行うのである。

この詩作品「ウサギの罨」のように、多くの構造的曖昧性をもつ作品の場合、言表情報をどう取り出すかという解説段階ですでにいくつもの再成情報が産出され、それらが併存しつつ錯綜して解釈者を惑わせる。解釈者は表現を行きつ戻りつしながら、自分にとって妥当性の高い解釈を求めて吟味をしなくてはならない。いったん到達した解釈成果が、その後得られた再成情報によってキャンセルされるということがありうるのである。あるいはまた、複数パターンの再成情報を併存させたままで解釈作業を打ち切るということも起こりうるであろう。

ここでは(18 a)に示した文認定のしかたについてのみ検討を行った。(18 b)のケースについても検討を加えると、さらに多様な再成情報が形成されうることになる。解釈の循環性や解釈の不確定性は、このように再成情報の形成と不可分である。

図7 「読んだため」の保留のしかたの可能性

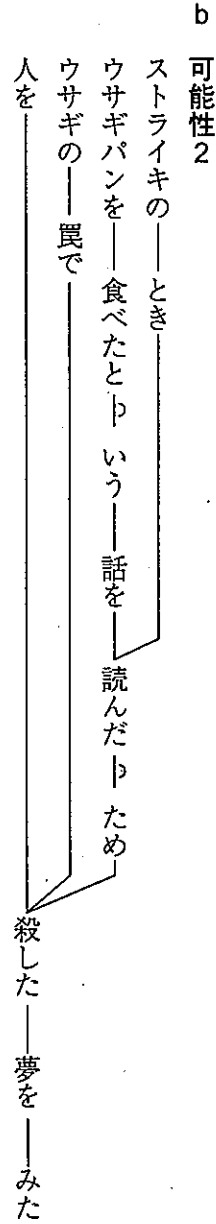
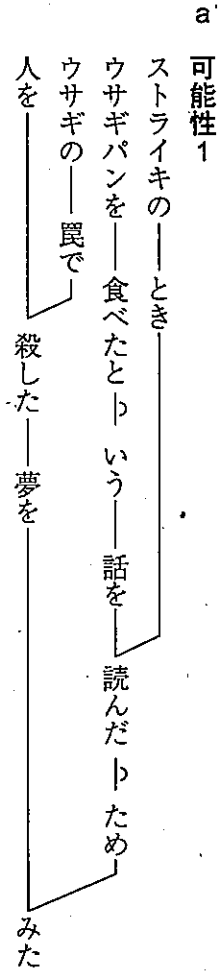


図8 「読んだため」の保留はaのみであり、bは構造的に許されない

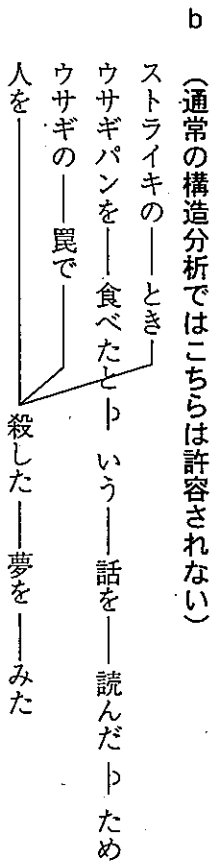
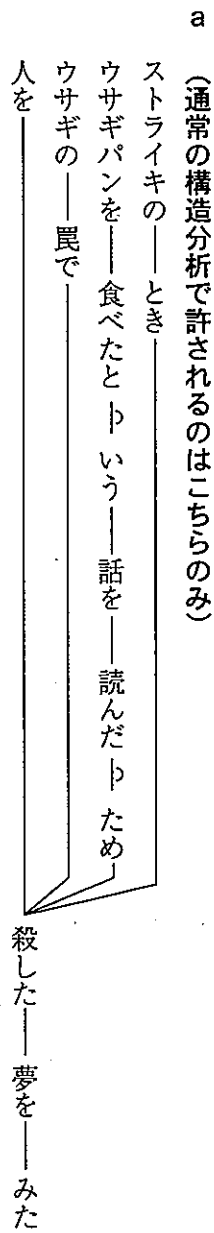


図9 「読んだため」の保留のしかたの可能性

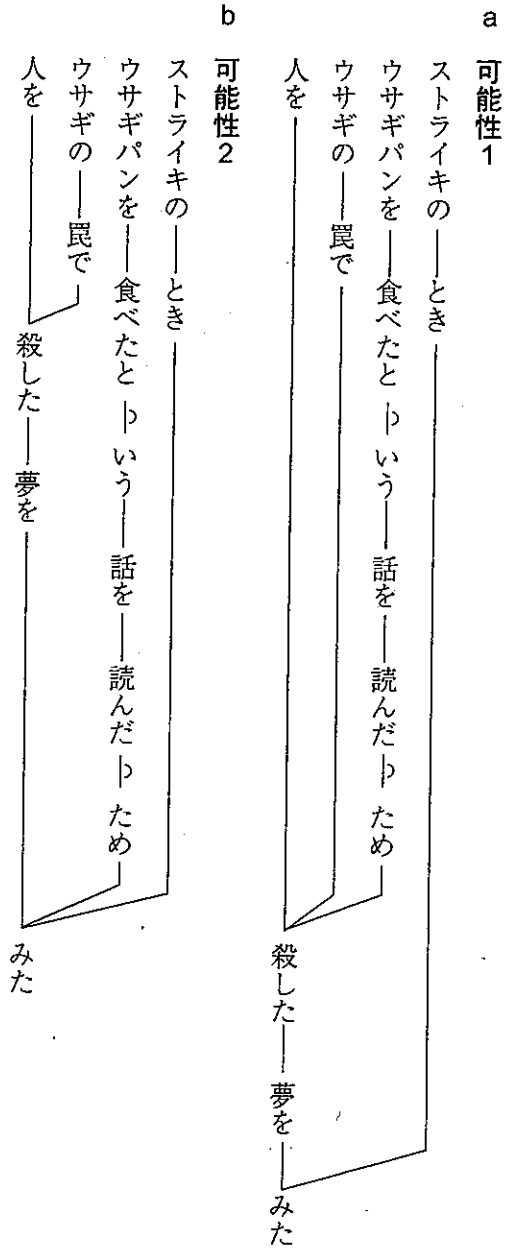
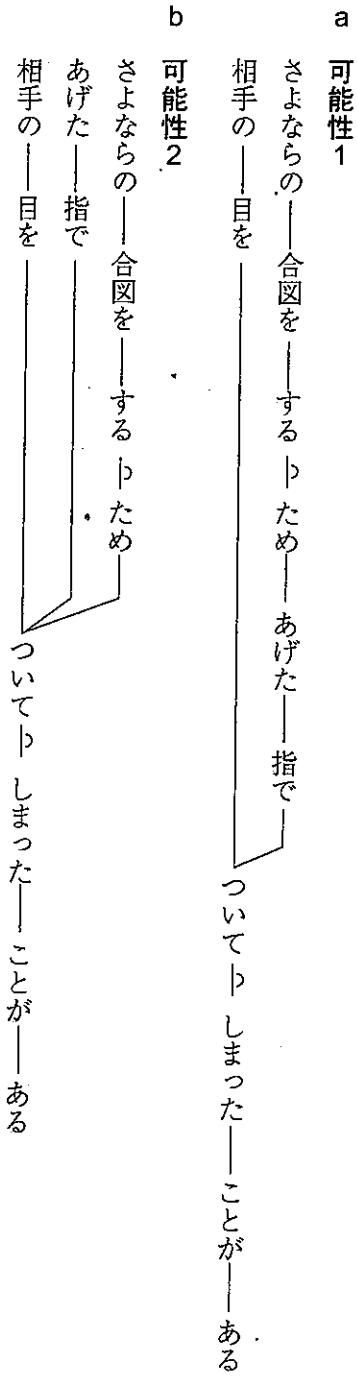


図10 「さよならの合図をするため」の保留のしかたの可能性



## ■五 おわりに

以上、言語表現が発話として使用される場合、《言語表現が伝える三つの情報》としては「言表情報 (information)」「言外情報 (exformation)」「実演情報 (performance)」の三者が区別され、また、《言語表現に基づく三つの情報》としては「合成情報 (conformation)」「変成情報 (deformation)」「再成情報 (reformation)」の二者が区別されることを述べた。この六種の情報区別は、語用論的な分析を行うための一指针であると位置づけている。

高本(二〇〇五)では「余剰解釈のマスクング」という呼び名を用いて、当面想定している解釈とは異なった別の解釈がしばしば隠蔽(シールド)されてしまうことを指摘した。自分自身の解釈を個別化・具体化・詳細化していけばいくほど、当人にとって余剰な解釈は自ずと隠蔽されていくのである。

しかし、実際にはそのシールドやマスクが外されて、解釈の多様性の中で右往左往しなくてはならない場合がある。そこでは解釈の可能性と優先度のせめぎあいが開示される。そのせめぎあいの実態を語用論的に記述するには、言表情報・言外情報・実演情報・合成情報・変成情報・再成情報のどの部分で対立・葛藤が起きているのかを見極める必要がある。

また、これら六種の情報は互いに独立していたり、あるいは、常に定まった順序で段階的に解釈されたりするのではなく、相互に連関・連繋・循環した関係にあるという点も重要である。言い換えれば、これら六種の情報は互いに依存しながら動的に

変化しうるものであって、そのダイナミズムにこそ語用論的な分析の困難さが胚胎していると言つてもよい。

文芸作品に関わらず、言語表現に対する解釈というのは、意味を個別化し、具体化、特殊化する作業である。そうすることで、意味の内包を限定し、外延を特定していく。解釈を問題にする場合、言語表現それ自体の構造的條件は一つの契機でしかなく、解釈者が有する認知的條件や、解釈者を取り巻く社会的條件が、個々の解釈事例には大きく関わってくる。したがって、言語体系が共有されていたとしても、個別的な解釈の成果については人それぞれで共有されないという事態が起こる。つまり、言語表現の構造的條件は、解釈者の認知的條件や社会的條件によつて乗り越えることができる可能性があるということだ。

「解釈のせめぎ合い」の問題は、「解釈の可能性」と「解釈の優先度」の問題に分けて捉えることができる。ところが、「解釈の可能性」の広がりや問題にする人は、可能性を広げつばなしにする傾向が見られる。反対に、「解釈の優先度」の決定性を問題にする人は、えてして都合主義的な文脈操作を押しつけていっこうに憚らない傾向が見られる。その結果、「解釈可能性」の問題と「解釈優先度」の問題は、なかなかうまく交わり合うことができないでいる。

一段抽象度を上げて言うならば、こうした現状は「解釈可能性」と解釈優先度とのせめぎ合いと呼ぶことができるだろう。六種の情報を仮に区別してみることで、解釈可能性と解釈優先度のせめぎ合いという問題を、今後とも探求していきたいと思つている。



■参考文献

- 高本條治 一九九四a 「何が旅ごころを誘うのか——J R 広告コピーの語用論的分析」学苑 六五〇
- 高本條治 一九九四b 「おはなが ながいのね」の解釈——まど・みちお『ぞうさん』の語用論的分析」『森野宗明教授退官記念論集言語・文学・国語教育』三省堂
- 高本條治 一九九五 「カワセミは飛んでいるのか?——川端茅舎句『翡翠の影こんこんと溯り』の語用論的分析」上越教育大学研究紀要 一四—二
- 高本條治 一九九六 「蟬がなき出すとお礼が口をつく事情——柳句『せみがなき出すとお世話に成ました』の語用論的分析」岡山大学国語研究 一〇
- 高本條治 一九九七a 「ただうなづいて見せたひと——川端康成『伊豆の踊子』の語用論的分析」上越教育大学研究紀要 一六一—二
- 高本條治 一九九七b 「くもの悲しみ・わたしの悲しみ——八木重吉『雲』の語用論的分析」上越教育大学研究紀要 七—二
- 高本條治 一九九八 「金子みすゞ『積つた雪』の語用論的分析——非平行的解釈を動機づける構造的條件」上越教育大学研究紀要 一八一—
- 高本條治 一九九九 「文節関係解析木(文節木)について——解釈記録のための骨組み」上越教育大学研究紀要 八—二

- 高本條治 二〇〇〇 「文節木を用いた構造表示と解釈記録」上越教育大学研究紀要 一九—二
- 高本條治 二〇〇五 「余剰解釈のマスキング——解釈可能性に対するシールド効果」上越教育大学研究紀要 二四—二
- 高本條治 二〇〇六 「言語表現が伝える三つの情報——語用論的分析のための一指針」上越教育大学国語研究 二〇
- 西山佑司 一九九九 「語用論の基礎概念」田窪行則(ほか)『談話と文脈』(岩波講座 言語の科学 第七卷) 岩波書店
- 西山佑司 二〇〇三 『日本語名詞句の意味論と語用論——指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房
- 東森勲・吉村あき子 二〇〇三 『関連性理論の新展開——認知とコミュニケーション』研究社
- Bezuidenhout, A. L. and R. K. Morris. 2004. 'Implicature, relevance and default inference'. In: I. A. Noveck and D. Sperber (eds.) *Experimental Pragmatics*. Palgrave Macmillan.
- Bianchi, C. 2004. *The Semantics / Pragmatics Distinction*. CSLI Publications.
- Black, E. 2006. *Pragmatic Stylistics*. Edinburgh University Press.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An introduction to pragmatics*. Blackwell. [武内道子(ほか訳)『ひとは発話をどう理解するか』ひつじ書房 一九九四年]
- Blakemore, D. 2002. *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*. Cambridge University Press.
- Carston, R. 1988. 'Implicature, explicature, and truth-theoretic

- semantics'. In: M. Kempson (ed.) *Mental Representations: The Interface Between Language and Reality*. Cambridge University Press. [Davis (1991) に収録]
- Carston, R. 1997. 'Informativeness, relevance and implicature'. In: Carston, R. and S. Uchida (eds.) *Relevance Theory: Applications and Implications*. John Benjamins.
- Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Blackwell.
- Carston, R. 2004. 'Truth-conditional content and conversational implicature'. In: Bianchi (2004).
- Davis, S. (ed.) 1991. *Pragmatics: A Reader*. Oxford University Press.
- Grundy, P. 1995. *Doing Pragmatics*. Edward Arnold. [Second Edition: 2000.]
- Grice, H. P. 1975. 'Logic and conversation'. In: P. Cole and J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics, 3: Speech Acts*. Academic Press. [Grice (1989)・Davis (1991) に収録]
- Grice, H. P. 1989. *Studies in the Ways of Words*. Harvard University Press. [清塚邦彦(訳)『論理と会話』勁草書房 一九九八年]
- Nøretanders, T. (trans. by J. Sydenham) 1998. *The User Illusion: Cutting Consciousness Down to Size*. Viking Penguin. [原著を Maerk Verden (Gyldendalake Boghandel, 1991) と「世界を感知する」[「世界に影響する」という意味。柴田裕之(訳)「ユーザーイリュージョン——意識とさう幻想」紀伊國屋書店 二〇〇二年]
- Récanaui, F. 1989. 'The pragmatics of what is said'. *Mind and Language* 4. [Davis (1991) に収録]
- Récanaui, F. 1993. *Direct Reference: From Language to Thought*. Blackwell.
- Récanaui, F. 2004a. "What is said" and the semantics / pragmatics distinction'. In: Bianchi (2004).
- Récanaui, F. 2004b. *Literal Meaning*. Cambridge University Press.
- Sadock, J. M. 1978. 'On testing for conversational implicature'. In: P. Cole (ed.) *Syntax and Semantics, 9: Pragmatics*. Academic Press. [Davis (1991) に収録]
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell. [Second Edition: 1995. 中田謙一(ほか訳)『関連性理論——伝達と認知』研究社出版 一九九三年(第二版 一九九九年)]
- Wilson, D. and Sperber, D. 1981. 'Inference and implicature'. In: C. Travis (ed.) *Meaning and Interpretation*. Basil Blackwell. [Davis (1991) に収録]

(本学教員)